



我邦現時ノ地租輕減問題二就キテ

神戸, 正雄

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 8(1):1-16

(Issue Date)

1910-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051493>



經濟學
商業學

國民經濟雜誌

第八卷

第一號

(明治四十三年
一月一日發行)

論

說

我邦現時ノ地租輕減問題ニ就キテ

京都法科大學教授

法學博士 神 戶 正 雄

地租ヲ輕減スベシトハ現時我國政界ノ一隅ニ行ハル、說ニシテ予輩亦之ニ同意スルニ吝ナラザル所ナリ唯ダ予輩ガ之ニ贊成スルノ理由竝ニ之ヲ實現スルノ方法ニ至テハ必ズシモ論者ノ說ト一致セズ乃チ茲ニ卑見ヲ披瀝シテ以テ予輩ノ本問題ニ對スル態度ヲ明ニセントス

想フニ方今地租輕減論ノ漸ク隆ナラントスルニ至レル所以ノ一動機ハ連年豐作ノ餘響ニ屬スル米價ノ下落ニ存スルガ如ク現ニ其地租輕減理由トシテ往々ニ

シテ唱ヘラル、所ノ農家ノ收支計算ノ如キ全ク此下落シタル米價ヲ基礎トシテ立テラレタルモノナリ(註二)然レドモ斯ノ如キ單ニ一時的現象ニ止マルベキモノヲ基礎トスル議論ノ到底永久ニ亘ルベキ税制更定ノ理由トスルニ足ラザルハ明白トス若モ偶々近時米價ノ下落シタルノ故ニ地租ヲ輕減スベシトイフナラハ近キ將來ニ於テ其上騰シタルトキハ則チ地租ヲ引上グベシト主張セザルベカラザルニ至ラン論者果シテ此時ニ臨ンデ此ヲ絶叫スルノ勇アリヤ否ヤ元來地租ニ於テ既ニ舊時ノ自然經濟的物納變動税制ヲ棄テ、新時代ノ貨幣經濟的金納定額税制ヲ採リタル以上ハ時々ノ米價變動ヨリ來ル負擔ノ過重ノ如キハ初メヨリ豫期シ且ツ忍容セザルベカラザルモノナリトス

(註一) 新紙ノ傳フル所ニヨレバ東京府下某々郡ノ有志者等ハ來ルベキ議會ニ地租輕減ノ請願ヲ爲スベク其理由トシテハ農家現在ノ狀況ハ到底現租税ノ負擔ニ堪ユル能ハザル所ナレバ適當ナル程度ニ地租ヲ輕減セラレタシトイフニアリテ其參考トシテ本年ノ米作收支概算ヲ學ケタリト曰ク米田一反歩ニツキ

收入	五俵即チ米二石代二十三圓
	諸稅負擔 五圓
支出	肥料 八圓五十錢
	手問 十一圓五十錢

計二十五圓

計二十六圓

近頃地租輕減論ノ頓ニ勢ヲ増シタル第二ノ動機ハ實ニ現内閣四十三年度ノ財政案ガ官吏ノ増俸、公債償還額ノ増加ヲ計リ同時ニ所得稅營業稅通行稅砂糖稅等ニ於テ減稅的稅制整理ヲ爲サントスルニ拘ラズ毫モ一般農業者階級ノ直接負擔タルベキ租稅特ニ地租ニ於ケル減稅的改正ヲ行ハザルノ不公平ヲ示セルコトニアリ蓋シ此財政案ノ爲メニ官吏ハ一面ニ増俸ニヨリテ其收入ヲ増加シ他面特ニ所得稅ニ於ケル勤勞所得收得者トシテ從來ヨリモ其負擔ヲ輕減スル事トナリ商業者ハ特ニ營業稅ニ於テ更ニ少クトモ比較的ニハ所得稅ニ於テ勤勞及資產共働所得收得者ノ名ノ下ニ輕負擔ヲ爲スコト、ナルニ農業者ハ地租ガ依然タルノミナラズ少クトモ彼等ノ一部ハ所得稅ニ於テ資產所得收得者トシテ重課サル、コト、ナルノ傾アリ若モ從來農業者ノ負擔ニシテ商工業者等ヨリモ比較的輕易ノ負擔ヲ爲シ若クハ輓近ニ於ケル大事件タル戰爭以後商工業者等トノ比較上從前ヨリモ一層輕キ負擔ヲ爲スコト、ナレルモノナランニハ這度ノ改案モ或ハ新公平ヲ齎ラシタルモノトシテ認諾セザルベカラザル所ナラン然ルニ事實ハムシロ之ト反對ニシテ從來農業者ハ少クトモ所謂直稅ノ重ナルモノニツキテハ商工

業者ヨリモ割合ニ重キ負擔ヲ爲シタル所ナリ(註二)或ハ此ハ各種業體ノ性質ニモ因ルモノナルベク且ツハ商工業者ニハ農業者ヨリモ多クノ所謂間接負擔ニ屬スル租稅負擔アレバ必ズシモ之ノミニヨリテハ斷スベカラズトスルモ既ニ戰後右ノ直稅負擔ニツキテ一層農業者ノ不利ニ歸着シタルコトノ證明セラル、ニ於テハ(註三)這回ノ改正案ハ到底農民階級ノ默止スルヲ許ササルノ案件タラズンバアラズ予輩亦之ヲ諒トス若モ今日ノ際我歲計ニシテ何等餘裕ノ之ナキニ於テハ或ハ地租輕減ヲ唱フル能ハザルベケンモ現ニ官吏増俸トイヒ若クハ二三租稅ノ輕減トイフガ如キ事項ノ行ハル、餘裕アリトイフニ於テハ地租ノ如キモノ、ムシロ之ヨリモ先キニ輕減セラレ又ハ少クトモ同時ニ輕減セラレンコトヲ要求スルハ洵ニ當然ノ要求タラザルヲ得ズ或ハ曰ハン官吏増俸ハ行政整理ト相伴フト予輩答ヘテ曰ハン行政整理必要ナラバ官吏増俸ト離レテモ尙且ツ行フベシ行政整理ニヨリ得タル餘收必ズシモ官吏増俸ニ向クベキノ理由ナシ假リニ一步ヲ譲リテ行政整理ニヨリテ得ラルベキ餘收ハ之ヲ官吏増俸ニ向クルヲ穩當トスルモ此以外ニ一千萬圓ノ大金ヲ官吏増俸ニ向クルノ必要ハ何處ニカアル特ニ今日ノ時

ハ卽チ國民舉ツテ戰後ノ經營過重負債鎖却ノ爲メニ堅忍スルノ時ナリ堅忍スベ
キノ時ナリ國民ハ既ニ頗ル過重ナル負擔ヲ爲スニ(註四)何ンゾ殊更ニ官吏ニ増俸
スルノ必要アラナムシロ今ノ際ハ行政整理ニヨリテ生ズベキ餘收ト雖モ出來
得ベキ丈ケ租稅輕減ノ方面ニ向クベキノ時ナリ官吏俸給ノ薄キコトハ之ヲ認ム
然レドモ今日ハ増給セザルモ有能者ノ得ラレザル程ノ狀態ニ非ズ他日財政ノ整
理セラレ借換ノ大事業ノ終リ國債償還ノ今一層ノ進展ヲ爲シタルノ時ヲ待ツテ
徐ロニ官吏増俸ヲ爲スモ毫モ遲シトセズ或ハ又曰ハン二三租稅ニ減稅的整理ヲ
行フコト、爲シタルハ初メヨリ減稅ヲ眼目トシタルニ非ズシテ各稅内ニ於ケル
公平負擔ヲ計リタルニ止マルト然レドモ其趣旨ノ何レニアリタルヲ問ハズ既ニ
結果ニ於テ減稅トナレル以上ハ其ノ之ニ直接關係アル國民階級ガ特ニ有利ノ地
位ヲ占ムルコト、ナレルモノトイハザルベカラズ隨テ比較的不利ノ地位ニアル
所ノモノガ反對ヲ唱フルハ確ニ至當ノコトナリ特ニ夫ノ二三ノ租稅内ニ於テ公
平ヲ計ラントスルナラバ何故ニ地租ノ内ニ於テモ公平ヲ計ラントセザル、政府ハ
果シテ此ニ於テ不公平ノ實ヲ認メザル乎勿論宅地租ニ於テハ之ガ整理ニ意アル

ガ如キモ田畑地租ニ於テ其意ナキハ果シテ此ニ不公平ヲ認メザルモノカ之ヲ認
ムルモ其行フノ難キヲ避ケントスルモノカ

(註二)(註三) 農民所得ト其公租負擔トノ割合竝ニ商業者所得ト其公租負擔トノ割合關係ハ大藏省調ニヨレバ常ニ農民ノ不
利ヲ示シ日露戰爭以後ニ於テハ一層農民ノ不利ヲ示セリ即チ左ノ如シ

戰前調

農業所得ニ對スル公租額ノ割合
〇、二七四

商業所得ニ對スル公租額ノ割合
〇、一四三

戰後調

農業所得ニ對スル公租額ノ割合
〇、二八〇

商業所得ニ對スル公租額ノ割合
〇、一四〇

最モ米價竝ニ田一反歩當リ公租米產額及ビ總收益金額ノ割合ハ下ノ如クニシテ

田一反歩當リ

年

米價

米產額

總收益金額

公租

三十一年以前五年間平均

一〇〇、〇

一〇〇、〇

一〇〇、〇

一〇〇、〇

三十二年乃至三十六年平均

一一五、五

一〇四、二

一二〇、四

一四六、八

三十七年乃至四十年平均

一三八、五

一二二、一

一五五、三

一七九、六

即三十七年以後ヲ以テ三十一年以前ト比スルニ於テハ公租ノ増進程度ガ總收益金額ノ増加程度ヨリモ大ナルコトヲ認ムベキ
モ而モ彼ヲ以テ三十二年乃至三十六年ト比スルニ於テハ公租増進割合ノ寧ロ總收益金額増加ノ割合ヨリモ小ニシテ隨テ戰後
ハ戰前ニ比シテ少クモ田ノ總收益金額ヨリ見レバ公租額ノ一層重キ負擔トナレルコトヲ認ムベカラズ蓋シ公租額ハ増加シ
タルモ米價ノ騰貴ト一反歩當リ產額ノ増進トカ優ニ之ヲ補償シテ餘アリタルニヨル但シ此ヨリシテ直チニ田ノ純收益ヨリ
見テ公租額ガ一層輕易トナレルモノトハ速斷スル能ハズ施肥ノ増加肥料價格ノ騰貴實銀ノ上騰等生産費價格ノ増加モ之ア
ルベクレバナリ之ヲ精算ニ計算シテ公租額ノ輕重ヲ見ルコトハ頗ル有益ノコトナルモ實行甚ク難シ暫ラク大藏省ノ前記調
ニヨルノ外ナカラン

(註四) 我國人民ノ租稅負擔ハ單ニ國稅ノミニテモ其所得ノ約一割二分ニ當リホーリユーノ租稅限度ヲ超ユルコト違シ勿論
右國稅ノ所得ニ對スル割合我國ヨリモ著大ナルコト伊太利ノ如キアリ(一割二分三厘) 奧地利ノ如キ亦一割一分三厘ノ重
キ負擔ヲ擔ヘトモ佛國ノ九分七厘英國ノ八分八厘獨逸ノ六分七厘北米合衆國ノ三分三厘ニ比スルニ於テハ我國ノ負擔ハ決
シテ輕易トイフベカラズ

人或ハ右ト關聯シテ公債償還額増加ノ餘裕アラハ何故ニ此ヲ以テ地租輕減ノ
資ニ充テザルトイハントス然シ予輩ハ此ニハ與スル能ハズ如何トナレハ此公債
償還ノ増加ニ充テントスル所ノ資源ハ畢竟前年度剩餘金トイヘル臨時歲入ニ外
ナラザレハ到底之ヲ以テ地租輕減ノ如キ永續的ノ事業ニ充ツルコトヲ許サバル
ノミナラズ他面公債ノ臨時償還増加ニ充ツルニハ最適當シタルモノナレハナリ
特ニ我國現時ノ狀態ニ在テハ戰後ニ於ケル大負債ノ銷却ハ決シテ看却スルヲ許
サバル大問題ニシテ今日ノ平和ノ時ヲ利用シテ出來ル丈ケ速ニ此ノ比類ナキノ
過重負債(註五)ヲ脱シ竝ニ更ニ近キ將來ニ於テ借換整理ノ大事業(註六)ヲ遂行セザ
ルベカラザルヨリ見ルモ右ノ公債償還額増加ヲ歡迎スベキ理由アルノミナラズ
四十三年以降ニ於テ償還ヲ要スル巨額ノ國庫債券モアリテ之ガ爲ニモ國債償還
額増加ノ失當ナラザルヲ辯護スベキ根據アリ或ハ現時ノ金融緩慢事業沈滯時ニ

於ケル國債償還額増加ノ餘弊ヲ難責スル者ナキニ非ズト雖モ之ヲ前舉ノ諸多ノ必要ニ顧ミルニ於テハムシロ避クベカラザルノ弊害ト認メザルベカラズ特ニ斯ノ如キノ弊害タル全ク一時的ノモノニシテ聽テハ順次穩健ナル事業ノ振興ヲ齎ラスベキモノナリ

(註五) 吾人ノ計算ニヨレハ國富ニ對スル國債ノ割合ハ諸大國中ニ就キ日本最不利ナリ即チ國富百圓ニツキ國債額日本ハ十二圓伊太利ハ十七圓露國ハ十四圓強佛國ハ十四圓弱獨逸ハ十圓奧國ハ七圓強英國ハ七圓弱北米合衆國ハ一圓ナリ故ニ我國ガ英奧ト同地位ニ進マントセバ現在債額ノ三分二ヲ銷却セザルベラズ露佛ト同地位ニ進マントセバ其三分一ヲ銷却セザルベカラズ

(註六) 我國内債ヲ四分ニ外債ヲ三分ニ借換ユルコトヲ得トセバ約三千萬圓ノ利子拂額ヲ節約スルヲ得ルコトハナル内債四分五厘外債三分五厘トスルモ千五百萬圓ヲ節約シ得ベシ

或ハ地租輕減ハ之ヲ四十四年度ヨリシテ實行ストセバ同年度ニ於ケル一般租税ノ自然増收及ビ關稅改正ニ伴フ所ノ増收額ニヨリテ優ニ辨スルヲ得ルコトハナルベク隨テ四十三年度ノ財政案ニ屬スル公債償還額増加官吏増俸並ニ二三租税ニ於ケル減稅的整理等凡ベテ政府ノ計畫ヲ破壞スルコトナクシテ進行スルコトヲ得ベシトイフ說アリ然レドモ夫ノ一般租税ノ自然増收トイヒ關稅改正ニ伴フ増收額トイフガ如キハ其性質既ニ不確實ナル分子ヲ帶ブルモノタルノミナラ

ズ既ニ政府ガ四十三年度豫算ニ於テ將來ニ永續スベキ性質ノ支出タル官吏増俸
竝ニ減稅的稅制整理ノ資源トシテ約二千萬圓ノ自然增收ヲ計上シ居ル所ナレハ
此上ニ四十四年度以降ニ於テ地租輕減ノ餘裕ヲ生ズルヤハ疑ハシト見做サル
ベカラザルベク假令四十四年度以降ニハ即チ之ヲ生ジ得トスルモ斯ノ如キモノ
ハ性質上物價賃銀ノ騰貴ヨリ生ズル經費ノ増加竝ニ國家ノ進運上愈々必要ニ屬
スルコト、ナルベキ經費ノ膨脹ニ應ズベキモノナレハ暫ラク之ヲ論外ニ置クコ
トヲ必要トスベシ又夫ノ關稅收入増加ノ如キモ既ニ政府ガ四十四年度ヨリ千三
百餘萬圓ノ增收ヲ豫期シテ所謂十一年計畫ニ於ケル繼續事業ノ年度割ヲ定ムル
所ナレハ之ヲ以テ地租輕減ニ充ツルコトハ能ハザルベク或ハ關稅收入ニ於テ豫
定額以上ノ增收ヲ生ズルコトナキヲ保スベカラズト雖モ固ヨリ之ヲ豫期シ之ニ
依頼シテ地租輕減ヲ待タントスルハ到底探ルベキニ非ルナリ故ニ地租輕減ニシ
テ行フベシトセハ即チ官吏増俸ニ切込ムノ外又他ニ良策ナキモノナリトス

我國現下ニ於ケル世ノ地租輕減說ノ動機竝ニ根據ハ大概右ニ舉ゲタル所ニ止
マルガ如シト雖モ予輩ハ更ニ此主張ノ理由ニ於ケル蛇足トシテ我國ノ土地負擔

ガ外國ニ比シテ割合ニ重シトイフコトヲ以テセントス固ヨリ地租課税額ガ一國歳入ニ於テ重キヲ成スヤ否ヤハ其國ノ沿革上ノ原因特ニ經濟上ノ發達程度ニ係ルモノナレバ(註七)單純ニ諸外國トノ比較ヲ爲スコトニヨリテ判斷ヲ下スハ早計ナリ且ツ夫レ土地負擔トイフモ固ヨリ單ニ所謂地租ノミナラズ土地ヨリ生ズル所得ニ課スル所ノ所得税土地ニ關スル諸多ノ交通税モ之アルベク特ニ土地ノ交通税ノ如キハ近頃諸國ニ於テ増加ノ傾ヲ示セリ加之土地ノ負擔トシテハ決シテ單ニ國税ノミヲ見ルベカラズシテ必ズヤ地方税及ビ其他ノ公課ヲモ併セ考察スベキモノナリト雖モ凡ベテ此等ノモノヲ考量スルコトハ頗ル困難事ニ屬スレバ暫ラク單ニ所謂地租ト稱スルモノハミニツキ我國ノ其レヲ以テ他ノ諸外國ノ其レニ比スルニ於テハ我國ノ著シク過重負擔ナルヲ發見スベシ(註八)以テ少クトモ所謂地租ノ輕減ヲ希望スベキ理由タルニ足ル

(註七) 舊時代ニアリテハ何レノ國ニ於テモ又今日モ幼稚ナル國ニ於テハ土地が主要ナル國民財産ニシテ且ツ主要ナル所得源ニ外ナラザレバ此ニ割合ニ重キ負擔ヲ課スル所ナレドモ經濟界ノ進歩スルニ伴ヒテハ諸他ノ租税ガ起リ來ツテ次第ニ地租ノ重要ヲ減スルハ必然ノ成行ナリ現ニ我國地租ト雖モ次第ニ其重要ヲ失墜シツハアリ即チ全租税收額中ニ於ケル地租收額ノ割合ハ左ノ如シ

明治六年

明治十一年

明治十五年

明治二十一年

明治二十五年

明治三十一年

明治三十五年

明治三十八年

明治四十二年

九一%

八九%

七五%

六九%

六一%

四〇%

二七%

二六%

二五%

(註八) 諸大國ノ地租額及ビ其全歳入ニ對スル割合ハ左ノ如シ

國名

年 度

地 租 額

全歳入ニ對スル地租ノ千分率

獨逸

一九〇六

四二、四一九、千馬克

六

英國

一九〇八

七三〇、千磅

五

佛國

一九〇九

一〇六、六二〇、千法

二七

伊太利

一九〇八

八三、二八〇、千利

三九

奧匈

一九〇五

一一九、二二二、千冠

三七

露國

一九〇九

六三、八二七、千留

二四

日本

一九〇九

八五、四八八、千圓

一六七

我國ノ地租負擔ノ異常ニ巨額ナルハ固ヨリ我國民經濟ノ尙幼稚ナルト古來久シク地租ニ慣熟シ來レルトニヨルヤ多シ

右最後ニイフ所ノ他諸國トノ比較地租負擔ノ說ハ固ヨリ國情ニ係ルコト大ナ

ルヲ以テ唯地租輕減說ヲ強ムル爲メノ補助資料タルニ止マル所ナレモ茲ニ此ト

關聯シテ當局者ノ注意ヲ要求スベキ重大ナル事項アリ他ニ非ズ由來地租ガ我國ノ國情ニアリテハ頗ル好財源ニシテ特ニ戰時等非常ノ場合ニ増率ヲ行フテ效果ノ大ナルモノナレハ却テ平時事ナキノ際ニ於テハ輕率シ擁護センコトヲ怠ルベカラズトイフコト是ナリ蓋シ戰時等ニアリテハ商工業ノ所得ハ打擊ヲ受クルコト多キモ農業者ノ所得ハ格別ノ移動ナク容易ニ此際ニ於ケル重負擔ニ堪ユルヲ得ベクレバナリ故ニ今ノ際ニ於テ地租ヲ輕減スルハ恰モ政府ガ此際成ルベク多ク公債ノ償還ヲ實行シテ非常ノ場合ニ備フベキト同一ナリ特ニ又其國家信用ノ増進國債價位ノ昇騰ヲ計ルノ趣意ヨリイフモ地租ノ如キ重要租稅ノ輕減整理サルハコトハ確カニ少クトモ夫ノ官吏増俸ニ勝ルモノトイハザルベカラズ

以上予輩ハ此際地租輕減方針ノ採ルベキコトヲ論ジタリト雖モ必ズシモ之ヲ以テ直チニ來年度又ハ來々年度ヨリ之ヲ實行スベシトイフニ非ズ又決シテ單純ナル稅率ノ輕減ヲ主張スルモノニ非ズ予輩ハムシロ此ノ大平和ノ時期ヲ利用シテ由來行フベクシテ行フコト能ハザリシ所ノ全地價ノ大修正事業ヲ斷行シテ然ル後右ノ減率ヲ爲スベキヲ唱フル者ナリ思フニ我國地價ノ初メテ制定セラル、

ヤ當時既ニ不公平アリキ其後ノ社會ノ變遷發達ハ更ニ一層ノ不公平ヲ齎ラスニ至レリ固ヨリ爾後幾度カ更正ヲ經タリトハイヘ尙ホ未ダ根本的ノ改修ヲ試ミタルコトハアラズ今若シ之ヲ斷行セバ假令一面ニ從來過當ニ小負擔ヲ爲シタル者ハ重負擔ヲ擔フコト、ナルトモ他方從來過重負擔ニ苦ミタル者ハ大ニ愁眉ヲ開キ國民ノ全體上ハ從來ヨリモ負擔ノ輕易ヲ感ズルニ至ルベキナリ(註九)特ニ爾來我國ノ土地價格ハ概シテ著シク騰貴シタル所ナレバ地價ニシテ改正サル、ニ於テハ恐ラク其稅率ハ著シク輕減セラル、コトヲ得ベシ(註十)固ヨリ政府モ這回宅地價ノ修正ヲ計畫スト傳ヘラル、モ其ノ他ノ地價ニ及バザルハ遺憾トセザルベカラズ(註十一)若夫レ此地價ヲ改正スルコトナクシテ單ニ其稅率ヲ輕減スルニ止メシカ負擔ノ公平竝ニ輕易ハ到底充分ニ達スルヲ得ベカラザルノミナラズ(註十二)他日非常ノ際ニ臨ミテ之ニ増率スルトキハ堪ユベカラザルノ重負擔トナリテ其目的ヲ達スベカラザルノ困難ニ遭遇スベシ故ニ地價修正ハ地租輕減ト相竝デ若クハ之ヨリモ一層重要ナル案件トイハザルベカラズ所謂稅制ノ整理ハ必ズヤ地價修正ヲ以テ中心ト爲スベキナリ但ダ此事業タル國民全體ニ取り國家ノ永遠ノ大

計ニ於テ頗ル重要事ニハ相違ナキモ而モ一時多少經濟界ノ動亂ヲ生ジ特ニ從來過小ナル負擔ヲ爲シタル者ニシテ將來重キ課稅ヲ負フコト、ナルベキモノ、盛ニ反對スルコトアルベクシテ頗ル困難事タルコトハ固ヨリ覺悟セザルベカラズ然レドモ苟モ當局者ニシテ國家國民全體ノ永遠ノ利益ヲ計ルノ至誠ヲ抱持スルニ於テハ敢テ爲シ得ラレザルコトニハ非ズト信ズ

(註九) 公平ナル租稅ガ不公平ナル租稅ヨリモ國民全體上ノ負擔輕易ナリトイフコトハ限界效用說ニヨリテ説明スルコトヲ得ベシ不公平ナル稅制ノ下ニ過重ノ負擔者ガ受ケタル苦痛ニシテ其稅制ノ公平トナルニ於テハ取去ラルベキモノハ同ジク不公平ナル稅制ノ下ニ於ケル過輕ノ負擔者ガ其稅制ノ公平トナルニ於テハ更ニ附加サルベキ苦痛ヨリモ大ナレバナリ此點ニ關シテハ理論上ニ於ケル特殊ノ卑見アリ詳論ノ機アルベシ

(註十) 四十一年一月現在全國地價總額十四億〇六百六十一萬〇九百八十四圓ナレバ之ヲ全土地平均四倍ニ修正サル、モノトセバ五十六億二千六百四十四萬三千九百三十九圓トナリ之ヨリシテ現在地租八千五百萬圓ヲ舉ルニハ僅カニ地價ノ一分五厘ニテ足ルコト、ナル予輩ノ案ニヨリ一千萬圓ヲ輕減スルコト、ナレバ地價ノ一分三厘餘ニテ足ルコト、ナル

(註十一) 我が法定地價ノ不公平ナルコトハ左記大藏省調ニヨリテ明ナリ、即チ法定地價ニ對スル賣買時價ノ割合ハ市街宅地ニアリテハ全國ノ平均十六倍ニシテ長崎縣ノ如キハ二十七倍福岡縣ハ二十六倍一割京都府二十四倍三割愛知縣二十倍七割東京府二十倍二割最低ハ沖縄縣ノ六倍六割滋賀縣ノ六倍九割トス郡村宅地ニアリテハ全國平均四倍九割ニシテ山口縣ハ十九倍東京府ハ十倍少キハ三倍ナルモアレドモ四五倍ナルヲ最多シトス更ニ田ハ地價ニ對スル時價ノ割合全國平均三倍二割ニシテ道廳府縣別ニシテハ北海道ノ一倍九割東京府ノ五倍三割山口縣ノ五倍二割ヲ除キテハ三倍前後ヲ多シトス如ハ全國平均四倍九割ニシテ北海道ノ一倍五割山口縣ノ十四倍二割高知縣ノ十一倍二割ヲ除キテハ四倍ヨリ六倍マデヲ多シトス(註十二) 地租ニ於ケル單純ナル稅率輕減ガ負擔ノ公平及輕易ヲ十分ニ達スル能ハザルコトハ勿論ナルモ幾分之ヲ達スルコ

トハ得ザルニ非ズ不公平ナル地價ノ下ニ於ケル過重負擔者ガ此輕率ニヨリ免ル、所ノ苦痛ハ同制度ノ下ニ於ケル過輕負擔者ガ同一ノ輕率ニヨリテ免ル、所ノ苦痛ニ比シテ大ナルモノアレバナリ

要スルニ予輩ハ此際地租ノ輕減ニ同意スルモノナレドモ而モ地價ノ大修正ヲ斷行シタル後ニ讓ルベキモノト信ズ故ニ予輩ハ官吏増俸ニ充ツベキモノヲ以テ地租輕減ニ向クベシトイフモノナレドモ地價ノ修正サル、マデハ暫ラク之ヲ右ノ地價修正ノ大費用ニ充ツルヲ至當ト信ズ(註三)而シテ若シ之ヲ充足シテ尙餘アラシカ宜シク之ヲ鐵道其他生産的經費ノ臨時增加額ニ充ツベシトス但ダ予輩ハ我國ノ土地課稅問題ガ此ヲ以テ盡キタリト爲スモノニ非ズシテ必ズヤ右ノ地價修正ヲ爲シタル後更ニ土地增價稅ヲ設定スルヲ以テ新地租制度ヲ補完スルニ必要ト爲スモノナリ若シ夫レ此增價稅ヨリ生ズル收入ニ至テハ尙今一層ノ稅制整理ニヨリテ他ノ諸稅輕減ノ資ニ充ツベキモノナルベシ尙終リニ重テ注意セン本問題ト關聯セル官吏増俸ハ借換整理ノ後相當ニ之ヲ爲スベシ今暫ラク之ヲ犧牲ニ供スルモ妨ナシト(四十二年十二月六日稿)

(註十三) 地修價正ノ爲メニ幾千ノ費用ヲ要スベキヤ試ミニ過去ニ於ケル地價創定當時ノ費用ヲ見ルニ第八期以降十三年度マデニ地租改正局費用トシテ計上サレタルモノ六十八萬一千二百〇一圓ナリ三十一年度特別地價修正ニ於ケル地租改正費

第八卷

(一六)

論 說

我邦現時ノ地租輕減問題ニ就キテ

第一號

一六

二十二萬六千五百七十九圓ナリ然レドモ今ノ時ニ於テ根本的ノ改正ヲ爲ストセバ到底如上ノ如キ小經費ノ能クスベキニ非
ルコトハ想像スルニ難カラズ然レドモ又官吏増俸ノ中止ニヨリ生ズル餘裕ニヨリ充タス能ハザル程巨額ニモ非ルヘシト信
ズ暫ラク精密ナル推算テ當局者ニ讓ル